

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
牛島委員	<p>前回の話しの流れで、新たな項目を盛り込んでいけることについて、話ししていきたい。 体験事業という項目を入れてほしいという話があった。</p>
石澤委員	<p>土曜日にそういった事業を取り組んでいるところがあるのでは。</p>
牛島委員	<p>近くでは小清水町でやっている。</p>
木村委員	<p>足寄の螺湾小学校で一般の人を呼んで授業をやっていると聞いた。</p>
牛島委員	<p>土曜日に特化してやるというのは学校の時間を広げる。</p>
木村委員	<p>土曜日といったのは、学校は今段階でやらなきゃならないことがいっぱいなので土曜日という話しをしたが平日でも構わない。ただ、社会教育でもいろんな事業をやっても来ない子は来ない。せっかく良いことをやっても学校授業として取り組まないと体験できないで終わってしまう子がいる。義務教育で取り込んでいかないと変わらない。ここで夢を育む体験って名前をうたっているけどこれって何なのって言うことになる。</p>
牛島委員	<p>どんな風に盛り込めるか</p>
高木部長	<p>学校だけでは全てできない。子ども達の週末の過ごし方という中で小清水なんかは授業ではなく地域の事業として取り組んでいる。地域と学校・家庭が理解してもらいながらどんなことができるか。</p>
木村委員	<p>連携を強めて奨励員とPTAと学校が協力して、月に一回でも何かできれば、キッズ共和国などとてもよい事業だと思う。 出てこない子ども達をどうしたら良いかが課題 地域と一体となった学校づくりの推進の項目にある学校評議委員とはどういった形でやっているのか。</p>
高木部長	<p>建設的に学校運営に意見をいただいている。</p>
木村委員	<p>意見をいただきながら学校づくりに生かしているというのは地域と一体となった学校づくりとは言えないのでは。もっと自治会だったりPTAだったり地域を巻き込んだ取組をしていかなければ、地域と一体となった学校づくりに繋がると思う。それに対する協力は全力で行っていきたい。</p>
高木部長	<p>おもしろ科学の祭典なんかはとてもいい取組である。子どもまつりも人数来ている方だと思うがいい事業だと思う。</p>
木村委員	<p>それでも子どもの人数からいうと半分も来ていない。いい事業であるけどそれで十分とは言い切れない。</p>
高木部長	<p>学校を回しながら実施しているので自校で開催したときは大半の子どもが参加していると思う。</p>

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
牛島委員	親の理解がないと子供が向いてこない。
木村委員	今の親の風習だと、よその子が行っていけばうちの子も行かしたいと思うのでは。PTAとかの連携も図っていくことが必要。
浅野主査	学校教育の中で地域の事業をどう受け止めるか。他から見ると社会教育の事業は結構やられていると思う。開かれた学校という意味ではこういう事業があるということを先生方がしっかり理解してもらっているかどうか。学校授業にせつかく指導者が教えに行ってもスケート大会に全く参加してくれないということもあり、先生が声かけしてくれるだけでも子ども達が参加しようという気になる。地域が学校に入っていくことと学校は地域に出て行くことを開かれた学校という意味で意識を持ってほしい。
沖崎委員	いじめとか不登校や引きこもりだとかを解消するための取組だとかが、計画の中に少し盛り込めたらいいのではないかな。
浅野主査	現在はスポーツセンターで不登校の相談員がいる。そこに来ている子ども達も結構いる。
高木部長	そこから再登校する子どももいる。
沖崎委員	経済と学力ということも言われるが、学校教育の中で就学援助とかもしっかり考えて行けたらよいのでは。
高木部長	認定こども園という声も上がっている。
牛島委員	小清水では中学校までは給食費ただとか小さな町はできることであるが。子育てをしやすい環境整備を考えていくうえで、計画にしっかり入れていくことも必要では。 子ども達が出てこられる環境、集まれる環境づくりとして、土日に取り組むこととして体験活動ができる案としては考えても良いのでは。
高木部長	博物館なども体験活動が15種類くらいメニューとして「こんなことができますよ」という資料を学校に配っている。学芸員が現在6人いる。
木村委員	博物館も建物としてはいろいろあるが結構頑張っている。
高木部長	町の博物館としては、学校教育で色々のノウハウを提供している。子ども達が出てくるのも大変なところがあるので学芸員が行く方が多い。
木村委員	消防署見学があつて毎回やってほしいと消防からいってくれたりとか職業訓練校で職業体験をやったり、地域に投げかければ色々協力してくれる人が出てくると思う。
浅野主査	学校教育の中で、学年ごとに何を教えたいかという目標があつて、それで何を体験させようかということに対して、町としてしっかりメニューとして押さえておく必要はあると思う。

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
浅野主査	<p>学校教育の義務教育の中で、範囲を広げてやろうとすると色々な壁ができたり、逆に地域で「こうした取組をするよ」ということに学校側が理解してもらった上で、取り込んでいくこともできるのではないかと。</p> <p>例えば、わざわざ催しを呼んできてやる時に広く呼びかけるだけでなく、学校の学年単位で見てもらうとかすると楽しかったと親も一緒に見ようとなるのでは。</p>
沖崎委員	<p>教師のマナー研修という意見もあるが、そうした教員の資質向上も必要なかもしれない。</p>
浅野主査	<p>現場の先生と直接接する機会があれば色々な情報交換ができるが、地域の会議では校長・教頭が出てきてもなかなか現場の先生にまで伝わらないことがあるのではないかと。もう少し現場の先生も忙しいかもしれないが接点があると地域の取組も理解してもらえるのかと思う。</p>
牛島委員	<p>体験活動が今の子ども達は体験が少ないのではないかとという意見が多い。</p>
木村委員	<p>若い方の意見でも多く絶対体験は必要だと思う。</p>
牛島委員	<p>子ども達に集まってもらって体験を通してコミュニケーションの力をつけるということがとても大事。夢を育む体験というテーマにあるように今ゲーム漬けになっている子ども達に体験をさせるところが絶対必要である。できる体験は色々あるはず、そこにいかに子ども達が集まる機会や声かけなどどうやって引き込んでいけるかが大事なところである。</p>
牧野委員	<p>少人数学級の推進については、35人以下の学級少人数で教えれば、学級も増えてそれだけお金もかかる訳だが、少人数であればいい教育ができるかというところではないが、先生の能力には限界があり、能力の差もある。</p> <p>先を見据えてとりあえず少人数学級を取り組んで行ったらどうかという意見である。</p> <p>震災のあったところで、小中高一貫教育ができれば、余裕を持って大学に行くにもわざわざ北見に行かなくても学べるとし、能力は問われるが、美幌高校にも特色のある学校にするのであれば、それくらい力を入れて、そこに農業構想など必要なところも残して行ければ良いと思う。</p> <p>自閉症の子どもで美幌高校に通っているが商業科で、普通科ではなかなか受け入れてくれないが、通えるところでは、受け入れてくれているところもある。支援学校ではなく、普通科にも受け入れてもらえないか。</p> <p>中学校ではできるが高校では受け入れできないということが道教委だから難しいということかもしれないが、町がバックアップをしていけば何人か通える子どももいる。</p> <p>こうしたことができれば、安心して通わすことができるし、人口が増える。障がい者がこれからも増える。というより隠していた者が出てくる。</p> <p>障がい者を押し込めるのではなく、町全体で受け入れて理解してくれる地域社会になってくれると安心して住まわせることができる。</p>

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
高木部長	<p>学校教員の免許制度のことをいうと小学校はオールラウンドで、中高は専門科目で中高はある程度一貫して教育はやれるかと思うが、そうした違いがある。</p> <p>小学校1年生は国費、2年生は道費、3～6年生は町費35人学級          中学校1年生は道費の負担で35人学級、2・3年は町費で40人学級          小学校は同じ担任が教え中学校は教科制で先生が替わる。</p> <p>障がいを持たれた子供は目に見えない子も含め多いように思います。</p>
牧野委員	<p>そういう子も環境があればきちっと育っていけるのですが、大人数だとそうはならない。</p> <p>同じ教育を受けられる権利があるのであれば、ちゃんとした教育を受ければ伸びる。間口を広げてくれるだけでよい。</p>
木村委員	<p>高等学校に支援学級があれば、通わしたいということになり人口増になるのかもしれない。</p>
木村委員	<p>中高一貫教育については、他でやっているところはどれだけあるのか。やっているケースや現状を知りたい。</p>
浅野主査	<p>計画としてやるということでは、もう少し情報を仕入ながら整理していきたい。</p> <p>就学援助や学習支援について新たな取り組みとして、高校に対しても新たな取り組みとして少し入れて行っても良いかとは思いますが。</p> <p>道立とはいえ町としても障害者支援であったり経済的な支援であったり、高校への支援は少し力を入れていってはどうか。</p>
牛島委員	<p>高校へのバスの支援も意見としてあったが高校としても頑張ってもらいたい、町としても中学校に働きかけたりしてほしい。美幌高校でも良い大学に行っているし、良いことしているのに、PRが足りない。中学校の先生にも伝わっていない。住民にも情報が行き届いていない。</p>
浅野主査	<p>小さな町では高校の情報が町の広報にでるが、美幌は少ない。</p>
牧野委員	<p>高校のPTA通信は色んなところに配っているが。</p>
牛島委員	<p>町内会の回覧にも回してもらったらよい。</p>
牧野委員	<p>高校も合併して4年なのですが、やっと安定した子どもの数にはなってきたが、これから周りの津別や女満別など高校もどうなるかによっては美幌高校に入れなくなる。そういう話しも聞くし安易に変なこともできない。農業科は道の施策に入るので、間口減にはしないと思うが。</p>
牛島委員	<p>美幌高校も間口が減っていく可能性は十分考えられる。</p> <p>留辺蘂は4間口あったのが今は一間口しかない。</p>
牧野委員	<p>バスケ部も今強いが、子ども達はそういうことに敏感である。</p>

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
浅野主査	中高一貫教育よりは、部活動でも中学高校の交流や一緒に練習をするなど、プレーを見て刺激を受けるだとかそうしたつながりも大事。
牛島委員	高校の先生が授業にゲストティーチャーとしてやるなどもよい。
浅野主査	いじめの関係や学級崩壊など、そういう状況にどう対応したらよいのか学校の先生だけでなく、周りの親や地域がどのようにして行けばよいのか研修なのかマニュアルなのかいじめの対策など、今のいじめの内容はSNSなど複雑化しているなかで、対策をどう計画に盛り込んでいけるかも少し整理していったらよい。
木村委員	不登校やいじめの問題もやらなきゃならないと思う オープンスクールの開設という意見もある。
牧野委員	美幌はそういう対策はして聞いていると思うが増えてはいる。
石澤委員	子どもに対して小さな頃から共感力を高め、リーダー教育を学ぶことでいじめがなくなったということをきいている。
浅野主査	体験学習ということは地域と一体となった学校づくりの推進に開かれた学校といったところに体験学習を盛り込むことで、細かいところは意見として押さえておくことでどうか。 学校の少子化に伴って、東陽小・美小のどちらかに統合という意見がアンケートにもあるので、大きな問題で様々な課題があるがこの中で協議したいと思う。
木村委員	単に維持費だけを考えたら2校にした方がよいのかもしれないが、雇用もなくなるし単純にできない。
牧野委員	数を減らすのは簡単だが感情も出てくる。
牛島委員	間違いなく10年後には子ども達の数減ってくる。
牧野委員	35人を割ったときに考えればというのが国の方針かもしれないが、その経費はでると考えればいいのかもしれないが、少ない人数で勉強に力が入るかもしれないが、競争力がどうかという面もある。
牛島委員	学区の区分けを考えていったらよいのかもしれないが。
牧野委員	経済的に回らなくなれば、やらざるを得ないかもしれないが。
木村委員	今すぐではなくても将来的に検討する委員会を作るとかしていったらよいのか。
高木部長	周辺校はスクールバスで対応ということはあるが、市内校3校が2校になった場合は、基本歩く距離も遠くなるという問題もあるかと思う。

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
伊藤委員	子どもの数を見ながら検討しなければならない段階に来たときに考えていけばよいのではないか。あまり先に考えていくと先を見て変な方向に進んでしまうことがある。
牧野委員	今後2クラスを維持できる要件を切る時期がいつになるのか押さえているのか。
牛島委員	人口減少傾向はある程度押さえていると思うが、2クラスを維持できるような方策を考えていく準備を進めるとか。
木村委員	検討委員会を立ち上げるべきなのかもしれないが。
浅野主査	結論は今すぐ出てこないと思うが、総合計画でも人口減少がキーワードになっているが、小中学校の教育環境の充実の中に、そうした人口減少に伴う検討といったニュアンスを盛り込んでいくか。
那須主幹	国の総合戦略の中では、子どもも増やす方策に取り組んで行きなさいというところで人口減少のカーブを押さえていくうえでは学校を減らすことを盛り込んでいくことは、今の段階では難しいかと思う。
木村委員	計画に盛り込むという意味では、まだ入れなくても良いのでは。それより子どもを増やす取組を計画に入れていった方がよいのでは。
伊藤委員	その可能性もまだあるので、マイナス面ばかりを考えるより前向きに考えていった方がよいのでは。
小室主幹	計画に検討するなど入れると不安感が広がってしまう。
高木部長	総合計画は、子ども達の夢と希望を持てるということが優先すべきであると思うが、そういう事態になったときには適正な間口を考えなければならないと思う。子ども達の学習環境を良くするという努力をしていくべき。
牧野委員	通学区域のバランスはとれているのか。
高木部長	それも適正かどうか含め通学区域の変更も考えていかなければならない
木村委員	学区関係なく行きたいところに行けるとなったらどうなるのか。
伊藤委員	まずは近いところに行くようになると思う。
小室主幹	制度的にできないことではない。 ただし、どこの学校に行っても平等な教育を維持するとしている。 ここ数年バランスが崩れて美小が多くなっている。今は出生が極端に少なく130人でそれを3校で割ると平均で40人だが、間違いなく偏ってきてるが、6年後は30何人という学校が出てくるが、遠い話しではないがまだ計画に検討と載せてしまうとそういう方向に加速してしまう。

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
牛島委員	適正配置による学区の見直しという感じがいいのでは。
高木部長	新興住宅ができると子どもが一時増える。 旭小は官舎の影響も大きい。
浅野主査	今は町も健全財政ですからお金がなくて町として統合するという話しは全くないので、教育環境の充実というところで学区の見直しや子育て支援とか教育支援で子どもを増やしていく方向性でどうか。
小田島委員	学校のバリアフリー化、旭小にはスロープがない。
高木部長	トイレの改修も行ってバリアフリー化に対応してはいる。
那須主幹	一度持ち帰って、教育委員会で整理して2周目でお示ししたい。
牛島委員	食育について、前回からの話しの続きで進めたい。
高木部長	学校給食といったところで話ししてましたが、食育は地産地消というところから農政での話しであるが、もう一つは健康増進を視点とした食育と実動としては学校給食という面であり、最終的に整理しなければならないと思う。 栄養士が学校を回りながら、1年生を対象に給食についてのお話しをしている。 給食のメニューを通じて家庭に食育をお知らせするようにしている。 給食費の回収率は100%にはならないまでも90数%高い回収率である。
牛島委員	給食費の値上げはないか。
高木委員	給食費は食材にあてているので、消費税が上がったときは厳しかったが今のところその中でやり繰りしている。 中学250円、小学は238円(一食) 消費税が10%になったら厳しい。 地産地消だと若干割高になる。
牛島委員	食育というと家庭科だとか保健の時間で教えていたという記憶である。 栄養士がせっかく出向くのであれば、どうやって献立を考えているとか栄養について、説明してあげたらよい。
小田島委員	農協でも学校授業で食育に取り組んでいる。
牧野委員	茶道を総合学習で旭小とかでやっているところもある。
木村委員	個食の子が多い。白いご飯だけで食べれない。ふりかけがないと食べれない。
高木部長	給食の時間も指導してはいるのだが

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
沖崎委員	うちの子も給食を順番に回しながら食べるように気をつけている。
小田島委員	うちの子は何も味付けないで食べる。
牧野委員	押しつけになると家庭の中でも、問題になる場合がある。子どもにとってプレッシャーになったりいじめに繋がる場合もある。広く色んな方に色々なことを教えてもらうことが大事。
浅野主査	<p>ここでいう食育という部分では、子ども達に学校現場で教える部分と農政や農協だとかでの取組や社会教育ではトレーニング教室の中で発育におけるスポーツと栄養という内容で指導したり、家庭で教えること食事が基本だと思うが、そこは子育てでの食育は民生部会で検討し、フォローしてもらえと思う。地産地消は経済部会で検討し、ここでは学校現場や地域の中での食育で整理していきたいと思う。</p> <p>栄養教諭は配置しないということによろしいのか。</p>
高木部長	これからは栄養教諭の任命替えをしていないが、次年度から配置することで配置に至ることとなる。
浅野主査	ここは教育委員会で次回までに整理する。
木村委員	地産地消の部分でメニュー出すときに美幌の食材が出ているのか。
高木部長	献立には載せている。お米は地元の米で、全てを地元で用意することは不可能であるが時期によっては無理なこともあるが、ある程度地元で調達できるものはしようと考えているし仕入れ先は押さえている。
木村委員	それは、美幌はこれだけ地元の食材を使っているということを地域の人に分かってもらっているのか。
高木部長	その努力はしている。
牛島委員	P T Aの総会などでもお知らせしては。
木村委員	一般住民にもっと知ってほしいし自慢して良いのでは。
高木部長	献立表にもどこの産物か載っている。
牧野委員	コミュニティスクールっていうのがあって地域の人と子ども達が交わって、正月と盆踊りなどで、取り組んでいる。
木村委員	給食を一般住民が食べられるとか。一般開放とかは。
高木部長	給食センターで予約して食べることはできる。
牛島委員	できるのであれば、1日限定何食とかPRしてもできるのであればどうか。



発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
高木部長	子ども達がどんなものを食べているかを地域の方に知ってもらうという意味ではできるが、広く誰でも安く出していくのは食べれるということは難しい。
浅野主査	食育というところで、食材を作るとかそこで料理を作るとかも食育に入ってくるのかもしれないが、学校教育の中でもできる部分があるかと思えますので、学校教育で持ち帰って整理してもらおう。
小田島委員	旭小は、農協でも協力してカレーを作る授業でやっている。
那須主幹	食育については、地産地消や地場産品は経済部会の協議項目で、子育ての部分では民生部会でも協議されるので、食育についてどちらで載せるかは事務局で一度整理させていただきたい。
牛島委員	生涯教育について社会教育担当から説明いただきたい。
高木部長	社会教育の分野は範囲が広い。 広い意味で博物館や図書館なども入るが社会教育の入口のところの説明で社会教育(マナビティーセンターが行っている)を説明させていただく。
荒井主幹	152頁について、文化活動だけでなくスポーツ活動も社会教育に含まれる。 社会教育事業、講座、研修については、社会教育事業を資料として載せているが、次回説明させていただくが、町広報・HP等を通じてお知らせして情報提供を行っている。 びほーるに関しては、利用状況について、お知らせしている。 教育資源リストを作成しているが、個人情報のこともあり、配布はしていないが、データベース化して情報提供している。 一人一人の生きがい、やりがいを豊かな心とまちづくりを目指し、生涯学習を推進し、マナセン、町民会館、スポセン、図書館、博物館の施設がありそれぞれに事業を行っている。 マナビティーセンターには51サークルがあり、曜日ごとに活動している。 関心の高いのは生活に直結している内容の講座が参加者にも興味がある。 子どもから高齢者の明和大学まで様々な講座があり、きっかけ作りをしている。 サークル活動を地域に還元するという講座を行っている。 社会教育奨励員がおもしろキッズ共和国など様々な事業を企画し関わってもらっている。 課題としてはサークルの高齢化、参加者の固定化、忙しい子ども達にどのように周知し、集めていくか、興味関心が幅広くともに学ぶことをどう取り組んでいけるかが課題である。
牛島委員	次回、社会教育グループに関することを中心に話し合いを進めていく。社会教育は時間がかかる。社会教育だけで話しが終わる。